三浦つとむと私の研究

内田　慶市

私が三浦つとむと最初に出会ったのは大学に入って間もない頃である。私が大学に入学した年（一九六九年）は、東大と東京教育大学の入試が中止されるという、まさに大学闘争のまっただ中の時期であり、当然その影響を受けないはずはなかった。日本中の大学は、学生大会、デモ、ストライキといった騒然とした雰囲気の中にあったが、そこから得たものは少なくなかった。とりわけ三浦つとむとの出会いは大きかったと言える。『弁証法はどういう科学か』という本により、「弁証法」の面白さを知り、その後さらに、言語と認識に関する著作、エッセイ類へと片っ端から読んでいったものである。『レーニンから疑え』に代表されるように、権威に盲従しないこと、通説を鵜呑みにしないという態度、あるいは学問・研究における「独学のすすめ」はその中から学んだものの一つであった。三浦つとむを通しては、その後、英語学の故宮下眞二とも巡り合うことができた。これも私にとっては大きな収穫であった。

現在、私は中国語学に関する研究と教育に従事しているが、三浦―時枝言語学は私の基本的な言語観としてその基盤に据えられている。つまり、「言語とは音楽や絵画などと同じく人の表現の一つ」であり、言語は「対象―認識―表現」という「過程的構造」を持つという基本的立場である。

この言語観に基づいて、これまでたとえば中国語における幾つかの現象を次のように説明してきた。

○〝有〟と〝在〟――対象のとらえ方の違い

「ある所に何かがある」ことを言う場合、中国語には二つの表現が可能です。

（1）那兒有医院。（あそこに病院があります）

（2）医院在那兒。（病院はあそこにあります）

（1）は、何かを主題としてそれについて展開していくというものではなく、それ自体が一つの新しい事象の表現であるのに対して、（2）は、主題（この場

合は〝医院〟を挙げて以下に叙述するというものです。従って（1）の〝医院〟と（2）の〝医院〟は、話し手の「とらえ方（認識）」において違いがあるわけです。（1）の〝医院〟は「不定」であり、（2）の〝医院〟は「特定」であるとか、また（1）は話し手が客観的に存在する事象をありのまま（直観直叙的）にとらえた表現であるのに対して、（2）はある主題について話し手が理性的にとらえ直した表現であるということもできます。

言語というのは「対象―認識―表現」という過程的構造を持ったものですが、一般的には対象の構造が異なれば認識も異なり、ひいては表現（形式）も異なってきます。しかし同じ対象であっても、とらえ方（認識）によって形式が違ってくる場合もあります。同じ「お湯」の「属性」でも「運動し変化する属性」に着目すれば「お湯が沸く」となり、その「静止し変化しない属性」をとらえて「お湯が熱い」ということも言えます。当然、逆に「同じ表現」でもその「対象」が異なる場合もあるわけで、言語を学んだり研究したりする時は、その「形式」のみにとらわれず、その裏にある「とらえ方」にまで踏み込んで見ていくことが重要なのです。また「とらえ方」は民族によっても異なるわけで、中国語を学ぶ場合には、中国人の思惟方法も併せて考えていかなければならないということになります。

（拙著『新漢語指南』光生館、四〇頁）

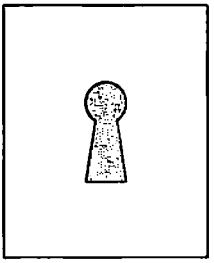
○〝了₁〟と〝了₂〟、〝着〟と〝在V……呢〟

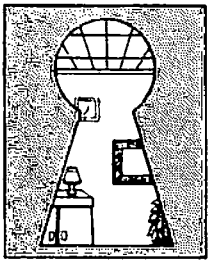
――言語における二つの表現

（主体的表現と客体的表現）――

言語は絵画や写真・映画などと同じく、人間の表現の一つです。

下の図を見て下さい。これは「鍵穴」を表しているほかに、実はもう一つ表していることがあります。そうです。この絵を描いたり、写真や映画を撮ったりした人の「位置」が示されているのです。「写真」は「写





心」であり、ドキュメント映画は正に作者の「目」が問われるゆえんです。絵画や写真・映画は、対象の表現（客体的表現）と作者の「位置」や「見方」の表現（主体的表現）が、切り離されずに同じ画面に統一されるという特徴を持っています。言語も同じくこの二つの表現を持っていますが、絵画などと違って、それぞれ別の種類の語として区別されるという特徴があります。

さて、このような二つの表現という点からすると、〝了1〟〝着〟は動作のあり方（姿）に着目したものであり、あくまでも「客体」の側にある表現であるのに対して、〝了2〟〝在V……（呢）〟は話し手の「新しい状況の発生」「変化の確認」や「対象が現在何をしているのかの認定」を表す言葉であり、「主体」の側に属する表現と言うことができます。〝着〟の文では「どのように」という連用修飾語がよくつくというのも、動作のあり方を深く見つめた表現であることの表れです。「主体的表現」の語は文全体を包み込むものであり、動作の細かな姿まで問題にするものではありません。〝在V……（呢）〟の説明でよく言われる「ひとまとまりの動作・行為全体を、大局的に少し離れた所から眺めている感じ」というのはそういうことなのです。中国語でどのような語が「主体的表現」に属し、どのような語が「客体的表現」に属するのか調べてみてはいかがでしょうか。

（同上書、七七頁）

最近は、特に十七世紀以降の東西の言語文化接触に関する研究をその中心テーマとしているが、その成果の一部を『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部、二〇〇一年十月）として公刊した。そこにおいても、以下の「まえがき」をご覧頂ければ、私の基本的な立場は何ら変わっていないことを読み取って頂けるものと考えている。

○「文化の翻訳」と「言語の翻訳」

十六世紀後半から東西に一つの大きな文化潮流が発生する。特にマテオ・リッチをその先駆けとする来華宣教師たちをその主な担い手とする、いわゆる「西学東漸」という文化現象である。

彼らは中国に当時のヨーロッパの先進的な近代科学

文明をもたらしたが、そのことはむしろ結果あるいは副産物であって、彼らが意図したのは当然、キリスト教の布教であり、彼らにとって最も重要なものは「バイブル」であったはずである。

ただ彼らが中国にもたらしたものは、「バイブル」や近代科学文明だけではなかった。

たとえば、戈（一九八三年）は H. Bernard の『Le Pére Mathieu Ricci et la société de son temps（利瑪竇神父傳）』（一九三七年）を援用して次のように述べている。

当時のイエズス会士たちは東方に布教にやってくる時には、みな「イソップ寓話」を携えており、しばしばその中の寓話を引用して、モラルを説いたのである。裴化行（Bernard. R. P. Henri —筆者）の『利瑪竇傳』には「ある一人の役人がイエスの事跡を述べた小冊子に見入っているのを見て、私は、これは我々の教えに使うものだから差し上げられないと言い、代わりに一冊のイソップを贈った」とある。

つまり、彼らは「バイブル」と「イソップ」を携えて中国にやって来たのであった。

ところで、異質の文化が接触する時、避けて通れないのが「言語」あるいは「翻訳」の問題である。

「彼の国」と「此の国」の「交通」のためには、まず最初に「彼の国」の言語を学ぶ必要に迫られるのであり、宣教師たちはこの問題に真正面から取り組んだのである。

現象から見れば、「翻訳」というのはAという言語のaという語彙をBという言語のbという語彙に「置き換える」ことであると考えることができる。

一方、「言語とは何か」ということについては、その拠って立つ言語観、認識論、ひいては世界観に深く関わることであるが、「言語は音楽や絵画などと同じく人間の表現の一つである」とする考え方が存在する。

こうした言語観に立つ時、言語とは「音声あるいは文字、すなわち形式と意味」から成り立つと見なすだけでは不十分であり、言語とは「対象—認識—表現」という過程的な構造を持つものであり、何よりも言語表現の基盤として、「話者（表現者）」、つまり、「人

間」の存在が不可欠となってくるわけである。

言語を用いるということは、道具箱から道具を持ち出してきて使用するというように、人間の認識から切り離された、いわば「実体」としての「語彙」や「文法」を使って組み立てていくということではないのである。同じ「犬」という「語彙」が使われていても、「私」と「彼」との認識は違うということは当然あるのである。

もちろん、言語は他者との「交通」のためにあるのだから、言語には「ある種の共通認識」「普遍的側面」も存在する。

「犬」はゴチックで書こうとも、明朝で書こうとも「犬」である。しかしながら、点を一つ欠けば「大」となり、これは全く違うものになってしまう。

すなわち言語は感性的な側面と、超感性的側面の両面を持っており、感性的な面を手がかりとしながら、実際の「交通」は超感性的な部分、すなわち「類としての側面」で行われるというわけである。この「共通認識」「普遍的認識」こそ、「語彙」であり、「文法」であり、いわゆる「規範（社会的約束事）」ということなのである。

言語をこのように見てきた時、ある言語のある「語彙」は、その言語を使用する民族、種族の、ある対象に対する「認識の集合」ということができるだろう。

いずれにせよ、「言語」は「人の認識の表現」であり、その言語を使用する民族、種族の「思惟方法」「文化」が反映されたものであり、「言語は文化そのもの」ということもできるのである。

こうして考えてくると、「翻訳」とは単に「語彙の置き換え」ということではなくなってくる。

a = b（たとえばdog = 犬）という時、そこでの「等価」というのは、音声や文字が等しいということでないのは明らかである。そこで等しいのは「価値(value)」であり、また「意味」と言ってもいいものである。それは「目に見えない」ものであり、その民族の「思惟」「文化」を「集合」「抽象」したものである。

「翻訳」はここにきて、「言語」の問題のみならず、「文化」の問題そのものであり、「文化移入」「文化受容」の態度、方法の問題となってくるのである。

宣教師たちにとって最も重要であった「バイブル」の翻訳において、彼らが何故あそこまで「訳語」にこだわったのかということも、この「翻訳」に対する見方（翻訳観）と深く関わっているはずである。

「パン」に対して彼らは何故「麺包」を使わず「餅」を使ったか。「ワイン」に対して「葡萄酒」でなくて何故「酒」ですませたか。そして、「God」は「神」か「上帝」かで何故あのような大論争が必要であったか。これらは、ひとえに「翻訳観」の問題である。

それを明らかにする上で、「イソップ」の中国語訳というのは極めて興味深い内容を含んでいる。

また、宣教師を中心とする近代欧米人は、中国語を学ぶ過程で、彼らの観点から中国語の様々な事象を描写してきた。東洋人とは違った視点で中国語をとらえてきたのである。このことは、中国語研究に対して多くの可能性を秘めている。

（『近代における東西言語文化接触の研究』「まえがき」より）

以上のように、私の現在までの中国語研究の基盤は、三浦一時枝言語論にある。今後も当面の中心課題である「東西言語文化接触研究」を通して個別的言語（中国語）の特徴を明らかにし、併せて年来の課題である「中国語学史」にも力を注いでいくつもりである。そして近い将来には「中国語はどういう言語か」をまとめてみたいと考えている。

内田　慶市（うちだ　けいいち）

・一九五一年、福井県生まれ。

・一九七八年、大阪市立大学大学院文学研究科博士課程満期退学。

・現在、関西大学文学部教授（中国語中国文学科）。

・専攻は中国語学（語法、語彙、方言）および中国語教育。主な著書に『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部）、『現代言語学批判』（三浦つとむ編）、『中国語表現のポイント99』（共著、好文出版）、『Ｍａｃで中国語』（共著、ひつじ書房）ほか論文、テキスト類多数。